

織華長屋

正義の味方、現る！

おいがっお

しとしとと雨が降っていた。

お昼ごろから、ずっと降りしきっている雨である。そのせいで、物売りやら何やらでにぎやかな町の通りも、いつもよりか静かなものであった。

まして陽が沈み、闇が落ち始めるこの刻、ことさら人通りは少なくなっている。

今夜は織華長屋しよつかなかやの住民たちも同様、全員長屋の中に引っこんでいた。

しかし、この長屋も外の通りと同じく、静かなものだ。ぼつりぼつりと雨が屋根をたたく音が聞こえるばかりである。

話し声どころか、人の気配もない。

ためしに長屋の一部屋をのぞいてみても、もぬけの殻である。机だのたんすだの置いてあるのだから、空き部屋というわけでもない。

そんな、人っ子一人いない部屋は一つではない。あそこの部屋も向こうの部屋も、みんな空っぽである。

そう、長屋に引っこんでいるとは言っても、住民たち

は今、自分たちの部屋にはいない。

彼らは織華長屋に存在する、秘密の地下室に集まっているのである。

「……よくぞ集まった、我が〈織華〉の者たちよ」

地下にある秘密の部屋には、ズラリと並んだ人影。

そこには異様な気が満ちていた。

「諸君、我々の目的はすでに知っておるな？」

部屋の中の一段高くなったところで、長屋の住民たちを鷹揚おうように見渡す者がいる。

翡翠の着物の少女である。そのふるまいは堂々としており、ただの少女らしからぬ雰囲気があった。

彼女の名は翠姫すいき。織華長屋の大家である。

「我ら悪の組織〈織華〉は、人間どもに比類なき恐怖を与えてやるのだ！」

翠姫の頭部にあるのは、ふさふさの狐の耳。さらには、細やかな毛に包まれたしっぽまで生えている。

織華長屋。それは、人ならざる者たちが人の世に紛れるための仮の姿に過ぎない。

その真の姿は、悪の妖怪らで構成された秘密組織〈織華〉の根城。

そして〈織華〉の妖怪たちを従える大首領こそ、大妖

怪天狐の翠姫なのだ。

「だが……」

薄暗い部屋を照らす行灯の光が、翠姫の顔に影を作る。

「我々の目的を阻止せんとする、邪魔な存在が……」

翠姫の顔つきがけわしくなる。

ぐるりと部下たちを見回したのち、我らが悪の大首領は、宿敵の名を口にした。

「そうだ、あの正義の味方を名乗る男、カンナギサムラ

イ座天丸！」

座天丸。これまで数々の妖怪たちと戦い、勝利を収めてきた正義の味方。

悪の組織としては、まったくもって腹立たしい相手だ。

「だが、あの男の快進撃もここまでよ……!」

翠姫は右のこぶしを握りしめた。

ゆらり、とゆれる行灯の光。

バツ、と右腕を振り上げると同時に、翠姫はこぶしを開く。

「出でよ、菜子！」

「はっ！」

翠姫が壇上から見下ろしていた、織華長屋の住人たち

——つまり、悪の妖怪たち——の間から声がした。

直後、一人の女がぐるりと宙を舞い、妖怪どもの群れ

から飛び出してきた。束ねた髪と衣服をなびかせ、女は

翠姫の前に降り立つ。

この女、菜子も、もちろん人間ではない。その顔立ちからわかるように、彼女は犬の妖怪である。

翠姫の前でひざまずく菜子。

「お前に座天丸討伐の使命を与える。よいな？」

「お任せを、翠姫様」

菜子の返事を聞き、

「うむ」

翠姫はやはり鷹揚にうなづく。

「たのんだぞ、菜子」

「はっ！」

菜子は力強く答えた。

「クク、楽しみになってきたな」

ニヤリ、と翠姫の口元がゆがむ。

「につくき座天丸が討たれて横たわる、その時が……!」

ククク、と翠姫の口からもれる笑い声。  
「フ、フッフッフ……」

やがて、彼女はその邪悪な笑いをこらえようとせせず、

……ハハハハハハハハハ！

大きな笑い声を、地下室に響きわたらせる。

ここは悪の組織〈織華〉の根城であった。

街のどこにでもある町民たちの住まい、長屋。この織華<sup>しよつか</sup>長屋も、一見すると、ごく普通の長屋にしか見えない。  
しかし、織華長屋に住む住民たちは、恐るべき正体の持ち主であり、恐るべき力の持ち主であり、恐るべき思想の持ち主であり………

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられた、古き時代の壮絶な大戦を描いた物語である――

今日の朝はどんよりとした天気であった。  
空には灰色の雲が浮かび、青い空は見えない。

「はあ……」

織華長屋の大家の部屋の前で、悪の組織〈織華〉が大首領、翠姫は、空を見上げてため息をついた。

「今日もこんな天気か」

昨日、おとといと、ずっとくもりであった。おとといなんかは雨まで降った。

「これじゃあ洗濯物が乾かないではないか」

悪の大首領にしては所帯<sup>しよたい</sup>じみた文句<sup>もんく</sup>を言いながら、翠

姫は長屋の木戸<sup>きど</sup>（長屋の玄関<sup>げんかん</sup>）を開けに行った。

長屋と路地をつなぐ木戸の開閉は、住民が当番制で行っているのだが、今日の当番は翠姫なのだ。

翠姫はカギを開けた木戸を引き、ギィ、と開門。

朝一の仕事を終えた彼女は、敷きっぱなしの布団をしまいに自室に戻る。

まだ自分の体温で少し暖かい布団をたたみ、部屋のすみっこに追いやる翠姫。そしてたたんだ布団の上からまくらを乗せた。

それをまくら屏風びょうぶ（小さな背の低い屏風）で隠せば、布団のお片づけは完了だ。

「お布団も、そろそろ干したいところなんだがな」

雨がきらいなわけではないが、気持ちよくお洗濯がでないのは困る。

おまけに、じめじめとした湿気は、もふもふした翠姫のしつぽの毛を、イヤな感じにしんなりさせてしまうのである。

出しっぱなしの方が楽でいいけど、今日しつぽは引っこめておこうかなあ。

翠姫がしつぽをゆらししていると、

「と〜ふい〜、と〜ふい〜……」

遠くからこんな声が聞こえてきた。

「おっ」

翠姫は耳をピクピクと動かす。

「いいところにあいつが来たな」

彼女は再び長屋の入り口に向かった。ちょうど朝ご飯

の準備をしようと思っていたのだ。

「と〜ふい〜、と〜ふい〜……」

声は、長屋の入り口を出た翠姫の右手からしてくる。

「と〜ふい〜、と〜ふい〜……」

じきに、天秤棒てんびんぼうをかついだ青年が、声と共に織華長屋の方へと歩いてきた。

「おおい、楽野」

青年に向かつて、翠姫は手を挙げる。

「と〜ふい……あつ、翠姫さん」

楽野と呼ばれた青年は、こちらに気づいて翠姫の元へとまっすぐにやってきた。

「おはようございます、翠姫さん」

「うむ、おはよう」

翠姫のなつっこい笑顔。彼女は悪の組織（織華）の大首領である。

「今日もまたお早いですね」

「楽野こそ、朝早くからご苦労だ」

「ははは、それがうちの商売ですから」

楽野が肩かたにかついだ天秤棒てんびんぼうの両端には、桶おけが吊り下げられている。桶の中には、なみなみと入った水と、水に

浮かぶ大きな豆腐とうふがあった。

楽野は豆腐屋である。朝ごはんのおかずかずに豆腐を使う人も多いので、彼は早くから家を出て、こうして豆腐を売りに出かけているのだ。

「それで翠姫さん、本日はいかがですか？」

「いたたくとしよう。そのために呼び止めたのだからな」  
翠姫は豆腐の入った桶を見やった。

「お豆腐を一丁……いや、二丁くれ」

「はい、ただいま！」

楽野は天秤棒を下ろした。次いで包丁とまな板を取り出し、桶から引きあげた豆腐をまな板の上に備える。

「あいにくの天気ですねえ」

「そうだなあ」

豆腐を切り分けながら話しかけてくる楽野に、同意する翠姫。

「見ろ、この空を。いつ雨が降ってもおかしくなさそう  
だぞ」

空に広がねずみ色の雲は、たんすの裏に積もったほこりのようだ。

「一雨来ますかね？」

「どうだかな。お天気、今日だけはもってけると、我われ

としてはうれしいのだが」

そう言いながら、翠姫はサイフに使っている巾着きんちやくを取り出した。

「ほら、ぴったりのはずだぞ」

「ありがとうございます」

たわいもない話をしつつ、お会計を済すませる翠姫。

「そろそろ他の者も外に出てくるころだ。しばらく待っているといい」

「ええ、そうさせてもらいます」

楽野にとつて、織華長屋の住民たちは、お得意様の一つである。

おまけにこの職を手に入れるまで、織華長屋にはずいぶん世話になったので、こと大家さんの翠姫には頭が上がりなかつたりするのだ。

「我は自分の部屋に帰る。お豆腐、雨が降る前に売り切れるといいな」

「はい！」

ぺこりと頭を下げる楽野の姿を見届けた翠姫は、部屋に引き返した。

今日は豆腐のみそ汁だな。

朝ご飯のことを考えながらお米を炊たく翠姫は、悪の大

妖怪、天狐であった。

午後、未の刻（二時ごろ）のことである。

「ややつ」

なにやらぼつぼつという音が聞こえてきたので、翠姫は様子を見に戸を開けてみた。

そうしたら案の定だ。

部屋の入りの戸を開けた翠姫の目に映る、雨模様。午前中から、ずつとはつきりしない天気であったが、とうとう来てしまった。

「まいったな……」

ぼやく翠姫。

思案気にしながら、彼女は部屋に引っこむ。

「やっぱり降ってたんですか、翠姫様？」

翠姫の様子を見てそうたずねたのは、部屋に来ていたお客さん。長屋の住民であり、犬の妖怪である菜子だ。

「うむ」

翠姫の言葉に、菜子の茶色いしっぽが垂れる。

「夕方には、やんでほしいところですが……」

「まったくだ」

翠姫が菜子の正面に座った。

「今夜は座天丸との決闘があるのだからな」  
そう。

翠姫の言う通り、今夜は悪の組織（織華）と、カンナギサムライ座天丸との決闘があるのだ。

「いちおう、弱い雨ではあるんだが」

「うーん、このままやんでくれることを期待するしかないですね」

雨の中の決闘というのも、なかなか乙なものかもしれないが、やっぱり晴れてる方がいい。

「雨は毛皮がぬれるからイヤだニヤ」

菜子のひざの上にちよこんと座った猫が、おもむろに顔を上げてそう言った。

彼は織華長屋のしたっぱ戦闘員、妖怪猫又が一匹、シケである。

今夜、座天丸を相手にするのは菜子であるが、それに加え、したっぱの三匹も決闘に参加するのだ。

「でも、ちゃんと決闘はやりませうニヤ。がんばるニヤ」

意気込むシケ。

「うむ、えらいぞシケ」

翠姫がそう言い、菜子はシケの頭をなでる。  
ごろごろ、とシケはのどを鳴らした。

「まあ、あんまりどしやぶりになるようなら、延期するつもりではいるけどな」

どしやぶりだからといって、まさかカサを差したまま、決闘を行うわけにもいくまい。

その時はおとなしく決闘を取りやめ、改めて果たし状を送ろうと考えている翠姫である。

「二人とも、とりあえずお茶のおかわりでもいるか？」  
「いいんですか？」

「それなら、ありがたくちようだいしますニヤ」  
決闘まで、まだまだ時間はある。

湯呑みを手にして翠姫たちは、のんびりと雨音を聞いていた。

糸のように細い雨が降る中、翠姫が織華長屋のとある部屋の戸を、とんとんとたたいていた。

「百助<sup>もすけ</sup>、いるか？」

するとすぐに、  
「お呼びでしょうか、翠姫様」  
戸が開かれる。

現れたのは、首から上が紫色の甲殻を持つムカデとなつた、長身の男。

彼の名前は百助。妖怪オオムカデである彼も、〈織華〉の一員の一人である。

「おお、百助。すまないが、ひとつ走りして、座天丸に今日は決闘やるぞって連絡してくれないか？」

そろそろ約束の時間であるが、雨はいまだやむ様子がない。

しかし、あまり気にならないほどの小雨なので、予定通り決闘をしよう、と翠姫は決めたのである。

「延期と思われても困るから、座天丸にも伝えたほうがいいからな。たのんでいいか？」

こんな雑用を〈織華〉の最古参たる百助に依頼したのは、単に翠姫の部屋から彼の部屋が一番近かったからである。

「承知いたしました」

しかし、百助はイヤな顔一つせずカサを手につつ。  
「ありがとな」

座天丸の住む、もみじ長屋へと小走りで行かう百助に礼を言った翠姫は、自分の部屋の前に戻り、戸を開けた。

「我らも行くぞ、お前たち！」  
「はい！」

翠姫の部屋から出てきたのは、四体の妖怪であった。まずは今夜、につつき座天丸と戦う菜子。それからお

供として参加する、猫又三匹衆のシロ、シマ、シケ。  
「せっかく決闘をやるんだ、今日こそ座天丸に目に物言  
わせてやるぞっ」

「うしゃーっ」

「やってやるにゃあー！」

「ニヤ！」

翠姫たちは、勇んで織華長屋を後にした。

目指すは、町のすぐそばにある、龍休山のふもとであ  
る。

その地こそが、座天丸との決闘場所。

善と悪の戦いの時が、刻々とせまっていた。

「クッククック……」

ざあざあ。

「よく来たな。我らが宿敵、カンナギサムライ座天丸……」

……

ざあざあ、ざあざあ。

「逃げずにやってきたことはほめてやるが……」

ざあざあ、ざあざあ、ざあざあ。

「……あの、翠姫さん？」

「なんだ？」

先ほど、龍休山のふもとにやってきたのは、正義の味  
方、座天丸。

彼が来るや否や、翠姫はすぐに決闘の前口上を始めた  
のである。

うでを組む翠姫の姿は、小さな体に合わぬ威圧感があ  
る。さすが大首領と言わんばかりだ。

そんな翠姫に、座天丸はえんりよがちに問いただした。

「いや……本当にやるんですか、決闘？」

ざあざあ。ざあざあ。

「ぼくが町を出る前くらいから、いきなり雨がひどくな  
りましたが……」

ざあざあ。ざあざあ。ざあざあ。

この場にいるのは、座天丸のほか、彼が来るのを待ち  
受けていた織華の妖怪たち。

全員、もれなくびしよぬれであった。

ざあざあ。ざあざあ。ざあざあ。

「あー……やるにはやる」

組んでいたうでをほどいた翠姫が言った。

「さっさと決闘やって、すぐ帰ろうって、ついさっき翠  
姫様と話してたんだ」

翠姫に続いてそう話すのは菜子。彼女の武器である



五尺棍ごしやくこん（戦闘用の長い棍）は、すでに水滴まみれであった。  
た。

ぶるぶるっ。

菜子が頭を振ると、髪の毛についた雨が飛び散る。しかし、こんな雨の前では、焼け石に水だ。

「ざあざあ。ざあざあ。」

「雨がひどいニヤ」

「こりやたまらんにヤ」

「早く帰りたいニヤ」

猫又たちも、みんなにやあにやあと鳴いている。

「ざあざあ、ざあざあ。ざあざあ。」

「同感です。早く終わらせましょう」

座天丸が刀に手をかけた。

菜子も五尺棍の重心を変え、座天丸に向き合う。

「続きをお願いします、翠姫様」

「よし」

翠姫が再びうでを組んだ。

「お前たち……今日こそ座天丸を滅ほろぼしてやるのだ！」

「はっ！」

菜子の五尺棍がゆらめく。

「座天丸、覚悟！」

「にやああ！」

（織華）の刺客どもは牙をむき、座天丸に襲いかかった！

決闘はあっさりと幕を閉じた。

「ああ、大丈夫かっ？」

翠姫がたおれた部下たちに向けよる。

「平気ですよ、このくらい」

多少ふらつきながらも、菜子が起きあがった。

「ほら、あんたたちも立てる？」

菜子がシロ、シマ、シケらに手を伸ばす。

「大丈夫ですにや……」

「また負けちゃったにやあ」

「悔しいニヤ」

菜子も猫又たちも、たいしたケガはなさそうだ。

「ふう、よかった」

翠姫は胸をなでおろした。

「みなさん、お疲れさまでした」

刀を収めた座天丸が、決闘相手をねぎらう。

「翠姫様、それでは……」

「うむ、帰ろう帰ろう」

ふだんならのんびりと歩いて帰路につくところだが、なにせこの大雨だ。すぐにでも屋根のある場所まで行きたい。

みんな急いで町まで帰る。

だが、いざ帰り道を進んでいると、途中で雨足は弱まり、町木戸をくぐるころには、とうとう雨はやんでしまったのだ。

「……………」

町の出入り口、無言で翠姫が髪かみの毛をしぼる。

菜子と猫又たちはぶるぶると体を震わせ、服や体に付いた水滴を飛ばした。

手ぬぐいで顔をふいているのは座天丸だ。

「……………もうちよつと前にやんでくれたらな」

菜子は少々不機嫌ふきげんそうだ。

「しかたないです。こんな日もありますよ」

「ま……………それもそうね」

座天丸にならない、菜子も手ぬぐいで顔をふく。

「はあ、帰ったら着替えなきゃ」

ぬれた下着がはだにびっちりくっついて、どうにも変な心地の菜子である。

「そうだな、我も全身ぬれねずみだ」

「ぼくもです」

あいにくの天気というのは、正義の味方であろうが、悪の妖怪だろうが、平等に訪れる。

「今日は悪かったな、座天丸。菜子たちも、ムチャをさせてすまなかった」

「お天気ばかりは、どうしようもないですからねえ」

「その通りです。翠姫様が気になさることではありませ  
ん」

一人の侍と五人の妖怪が、町を歩く。

午後の天気は、雨のちくもりであった。

明日こそは洗濯物が干せるといいな。

びしゃびしゃの着物を羽織はおった翠姫は、そんなことを

考えていた。

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられた、古き時代の壮絶な、そう、壮絶な大戦を描いた物語である——